
Intention＊HIGHWAY

FrangBeat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I n t e n t i o n * H I G H W A Y

【Nコード】

N 5 5 6 1 B A

【作者名】

F r a n g B e a t

【あらすじ】

風の中を颯爽とかける者。「ハイウェイランナー」。
走ることに熱を燃やす人々をこう呼ぶ。

凛々ヶ丘大学マラソン部で巻き起こる走ることへの情熱の物語。

第1話く東勇次く（前書き）

箱根駅伝がありました。それを見てこれを書きたくなりました。

第1話く東勇次く

【風の^{ハイ}中を^{ウエイ}颯^{ラン}爽^{ナー}とかける者】

人々は“走る”事に熱を燃やしていた。

「はっ・・・はっ・・・はっ・・・」

ここにも一人。走ること^に熱を燃やしている少年がいた。

「はっ・・・はっ・・・あと2キロか。」

^{あずまうじ}
東勇次。

「勇次！！もうすぐだ！！」

20kmマラソン。そのゴール地点の近くに勇次は走っていた。

「しかし、勇次の伸び率はすごいよな。」

「ああ。まだ1年生にしてもう区大会のレギュラーだもんな。」

「それだけの走力が奴にはあるということだ。」

東勇次はこの春“凛々ヶ丘大学”に入学した。

凛々ヶ丘大学はこのマラソン部が有名で毎年秋に行われる“凛々ヶ丘駅伝”の常連校だった。

現在目指している、凜々ヶ丘区大会は、この凜々ヶ丘駅伝に参加するための予選大会のようなもの。

この大会で10位以内にゴールしなければ参加はできない。

「70分ジャスト!」

「すげえ……20kmを70分かよ……」

「俺達でも80分強はかかるぜ……」

勇次の走りは凜々ヶ丘大学マラソン部に天才が来たと言われるほどの走りだった。

「お疲れ勇次! ほれタオル。」

「あ、ありがとうございます。」

「それにしてもビックリしたわ。」

「何がですか?」

「お前の走り。20kmを70分で走るってすごいわ。」

「いえ……ありがとうございます。」

今はなしているのは桜榎並。さくらえなみ

勇次の憧れの先輩であり、片思いの相手。

性格はとても温厚。少し男っぽいところはあるが、走りに対してとても熱い。

「あ、そうだ。勇次。」

「はい？」

「今日飲みにも行かないか？」

「二人ですか??」

「あ、予定あるんだったらいいんだけど・・・」

「いえ！行きます！」

「そっか。よかった。じゃあ、またあとでな。」

「はい。」

榎並も凜々ヶ丘駅伝に出るための区大会に出場を予定している。

「よ！勇次。」

「おう、大輔。」

ろくはだいすけ
緑覇大輔。

勇次のクラスメイトで同じマラソン部。

「20 kmを70分か。さすが勇次。」

「ははは・・・」

「区大会頑張れよ。」

「おう！サンキュー！」

「じゃ。」

「おう。」

区大会に出場する予定だったが、練習中に骨折をしてしまい。辞退してしまった。

「一七一分五一秒。」

榎並先輩が走り終わった。

「先輩。お疲れ様です。タオルです。」

「おう。サンキュー。どうしても勇次の記録を抜けない・・・」

「無理に抜こうとしなくても先輩は速いじゃないですか。大丈夫ですよ。」

「ああ。ありがとう。」

キンコーンカーンコーン。

部活終了のチャイムが鳴った。

「お、終了だな。各自荷物を片付けてすぐに帰宅するように。今日の部活は終了だ。お疲れ。」

「お疲れ様でした。」

みんな一斉に帰っていく。

「よし！勇次、行くか。」

「はい！」

榎並と勇次は榎並の行きつけの居酒屋に向かった。

「こんにちは。」

「お、榎並ちゃん。彼氏かい？？」

「いや。部活の後輩。」

「東勇次です。」

「お、勇次君か。俺はここの主人の汪沙帝八郎おうさていはちろうってんだ。よろしくな。」

「はい。よろしくお願いします。」

「じゃあ。奥の部屋借りるよ。」

「あいよ。」

榎並は勇次を引っ張り奥の個室へと向かった。

「主人さん。いい人ですね。」

「ああ。小さいころから世話になっててな。両親が留守の時は必ずあたしの面倒を見てくれた。」

「そうですか・・・あ、先輩の両親って何のお仕事をしてるんですたっけ？」

「父は弁護士だ。母は今入院中だ。」

「そうでしたか・・・」

「さて飲もう。」

「はい。」

二人は酒を注文し、乾杯をした。

その後勇次が区大会への意気込みを言い、榎並が走るときの注意点などを勇次に教えた。

帰るころにはもう午前4時を回っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5561ba/>

Intention＊HIGHWAY

2012年1月15日03時48分発行